

汎美

汎美術協会会員便り
Vol. 36

2015年3月
発行・汎美術協会事務局

巻 頭 言

表現に対する思いを大切に 代表 田中準造

汎美展に出品している皆様、それぞれの思いを込めた作品を出品いただきまして有難うございます。私どもの汎美会は、それぞれの出品者の作品を大切に展示しています。更に相互に鑑賞し意見を交換したり、それぞれの作品を通して作家の主張が明確に表現されているかの話し合う機会も持っています。この様な場を大切にして、それぞれ作家の表現のあり方の向上も図っています。

本展に出品された作品は、それぞれの作者が、思いを込めて表現してきた成果の賜です。従って、思いを他の人・鑑賞者に伝える努力は、表現形式・表現材料などが異なろうとも思いを込めた表現活動の発露の結果です。作家としては、日々の表現活動への研鑽が大切です。

ここで、皆様にお願ひがあります。皆様の周囲には多くの美術・造形活動をしていて、発表をしていない方々がいるかと思ひます。そこで、本展は、作家の意思を大切にして発表出来る展覧会であることをお伝えして頂き、是非ご一緒に美術・造形活動をしましうと、お誘ひ頂けたら幸ひです。

目 次

巻頭言 田中準造	2
ルイ・ヴィエルヌと私 齊藤公次郎	3
思いつくままに '14	
「汎美再興試練の時期」 吉田敦彦	5
研修報告 研修係	
□チューリッヒ美術館展をみて 島田隆一	10
□「チューリッヒ美術館展を観て」 相京三千代	12
□研修会・チューリッヒ美術館展に参加して 吉田敦彦	13
ムーミン展雑感 三竹康子	14
今でも想う事 保倉一郎	15
春秋游吟 25 (撰) 愚 聴風	18
茜モノローグ 3 愚 聴風	21
事務局より 大野善孝	22

表紙デザイン：三竹康子

カット：愚 聴風

ルイ・ヴィエルヌと私

齊藤公二郎

ルイ・ヴィエルヌ —— 画家ではない。19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍したフランスの作曲家、オルガニストである。代表作とはいえないが、学校のキンコンカンコン♪～というチャイム音（ドミレソ ドレミド ミドレソ ソレミド）は、彼のオルガン曲「ウェストミンスターの鐘」の主題がそのまま使用されている。

彼はドビュッシーやラベルといったフランス印象派が盛んな時代に生きたが、その作風は非常に浪漫主義的で繊細であり、メランコリー漂うものであった。オルガニストだけに作品はオルガン曲中心で、他に室内楽、ピアノ曲、合唱曲があるが、そのほとんどは短調の曲である。明るく陽気な曲はほとんどない。場合によっては陰鬱な響きが曲全体を覆っている作品もある。先のチャイム音も長調の曲でありながら何故かもの悲しい。通常の調性で作曲しながらここまで暗い作品を遺した人物はどういう人生を送ったのか。

ヴィエルヌは先天性白内障を患って生まれた。生来極度の弱視で後半生は全盲に近く、作曲は点字の楽譜で行っていたという。30代には、見えないことが災いしてか転倒して右脛を骨折、60歳で心臓障害を起こし、およそ健康には恵まれない生涯だった。結婚はして子も設けたが、事もあろうに自分の作品を献呈したオルガニストに妻を取られ、子供も結核や第一次世界大戦で次々と亡くなり、弟も戦死し、父母も若い頃に亡くしていたことから、孤独のあまり自殺未遂も起こした。若い頃、折角師事した高名な作曲家フランクも、師事してわずか1ヶ月後に事故死している。

最後には、ノートルダム寺院で聴衆を前にオルガンを即興で弾いていたとき、脳あるいは心臓の発作的疾患により突っ伏して鍵盤に倒れかかり、オルガンの壮大な音が響き渡るなか、急死している。芸術家として劇的な最期であった。

不幸の連続だった彼の音楽にはどうしても影が付きまとう。特に長男が戦死した後に書かれたピアノ五重奏曲は憂鬱な調べに終始し、救いのない音楽になっている。特に第1楽章の第2主題はあまりに美しくあまりに切ない。大概の世人が聴けば気が滅入る一方かもしれない。

私がヴィエルヌの音楽と出会ったのは20代の終わりころか、「フランス近代ピアノ曲集」（ピアノ ジャン・ドワイアン）というレコードのなかの「六つの前奏曲」を聴いたのが最初だった。ピアノの透明な響きが印象に残り、その後幾つか彼のCDを買い求めることとなった。

とはいってもヴィエルヌの曲を収めたCDは数少なく、第1番から第4番までのオルガン交響曲（オルガン独奏による）と先程のピアノ五重奏曲、それに合唱曲くらいしか店頭では手に入らなかった。（今ではアマゾン等を利用して通販で購入できると思うので、改めてこれから彼の曲を聴いてみたいと思う。）

私が通常一番好んで聴くのは、オルガン交響曲第1番ニ短調の第5楽章、第6楽章である。まだ若いときの作品であり、この2楽章はヴィエルヌにしては珍しく明るい曲調となっている。第5楽章のアンダンテは祈りの曲だが、音階が上へ上へと連続して昇っ

ていく旋律は希望に満ち満ちている。第6楽章のフィナーレは、華やかで堂々としており、サン・サーンスの「交響曲第3番ハ短調」の終楽章を想起させる。私はよく就寝の際にこれを聴き、安心して睡眠に入る。

病床に伏しているときなどは、ピアノ五重奏曲。この暗すぎる曲は、私のような臍曲がり人間には却って心地よい。痛みや辛さ、心の憂いがなどが浄化されていくようだ。心に浸みるモーツァルトの癒やしとは違う、何か神経の髪に直接響いてくるような音楽である。

ヴィエルヌと私の誕生日が同じであることがわかったのは、極々最近である。評伝もないので、ネットでのウィキを確認した結果で驚愕した次第。且つ、私が最大に敬愛する作曲家ベルリオーズの没年の翌年に誕生していたことも、ヴィエルヌに愛着を覚えることにつながった。曲調、表現手段、性格や生き方まで全く違うので単純に「生まれ変わり」という発想はできないものの、私としては何かしらの繋がりを期待してしまう。

私は若い頃、夭折の芸術家、あるいは不幸な生涯を送った芸術家に特別な思い入れを持ち、そういった人たちの作品は他の人の作品に比して一段高いものと見なす癖があった。もちろん、早く逝ってしまった人の作品が100歳生きた人の作品より優れているなどということは有り得ない話で、マスコミや一部の評論家によく惑わされたものだと思う。青木繁が90まで生きたなら後半生に更に凄い作品が描けたかもしれず、ランボーが20歳で亡くなっていたとしても、その詩の価値は変わらないだろう。また、何一つ不自由のない環境下で育った者（メンデルスゾーン等）が優れた作品を残せないということはないし、不幸続きの者は、その不幸がもっと緩和されていた方が傑作を多く残せたかもしれない。

要は自分が置かれた環境をどう生かすか、それに長けた創造者が世に認められるものを遺していくのであろう。ヴィエルヌは自分の蓄積された不幸を意識して作品に投影させた。それがヴィエルヌのヴィエルヌたらしめる曲調を生んだ。最後は、後世に語り継がれるセンセーショナルな最期を迎え、自らのコーダを演出したのだ。

ところで私個人は才能も生活能力・資金力もないところから、ひとつの団体に所属し、中間管理職として働き蜂のような生活を送っている。これまで危ういことはあったが、運良く大きな不幸には邂逅していない。夭折の、あるいは無頼派の芸術家に憧れていた時代はあったものの、それが意味するような退廃した生活を最後は避けてきている。人並みに、20代までは全く考えていなかった結婚もした。そうして今、いつのまにか実年を迎えた。この平凡な環境をどう生かすのか？

何年も何年も前から、創造者として爆発したいと思っていた。爆発するには準備が要る。その準備期間がいったい何年になるのか？定年退職といった、ありきたりのあまりに凡々な区切りを考えて良いのだろうか？私の創造の爆発には資金も必要だろう。一方では芸術家としての実績が伴わないのに大きな企画をすれば、単なるマスコミの餌食になるだけだろう。

いや、もういい。年越しにヴィエルヌのオルガン交響曲を聴きながらの —— 雑感とは思いたくない —— 雑感である。

□ヴィエルヌ：Louis Vierne フランス 1870-1937

フランク、ヴィドールに師事したノートルダム大聖堂のオルガニスト。

○オルガン交響曲1～6 ○24の自由な形式による小品

○幻想的な小品組曲 全6曲 ○トリプティーク

○ピアノ五重奏曲 等あり。

(編集付解)

思いつくままに'14 「汎美再興：試練の時期」

2014 年秋 吉田敦彦



今も我々の汎美は曲がり角に来ているようにみえます。これまでこの会の土台を背負って来てくださった方々が次々と、トシや体調などからの問題で手を引かざるを得なくなってきたのが主な原因でしょう。かく言う私もこの7月で78歳になり、心身ともに急激な老化現象にさらされるようになってきていて、いつまで心身の健康を保てるかの自信を失ってきていますし。

その上、会場を借りている美術館の春と秋の両方共の5年毎見直しの時期が2年後に迫ってきていまして、すでに簡単なアンケート調査やヒアリングなどが行われ始めています。今後美術館側がどういう選考基準で対処して来るのか予測が付きません。前回のようにもめることが無ければ良いのですが、もしかしての最悪の場合は、どちらの会場も使えなくなるかもしれないという不安さもあります。言うまでもなく汎美術協会は汎美展を主宰する美術団体ですから、展覧会場を失うと言うことは会の存続にかかわることです。

汎美は他の団体とは異なり「公募展の民主化」と言う高い理想を掲げてきました。審査などを通して上下の人間関係を生み出し自由な表現を抑圧しがちな在来の公募展の在り方に対して、作家の平等を主とする理想的なあるべき姿を追求してきまして、ヒエラルキー(階層性)や権威主義に毒されない、自由に自分の表現を発表できる会場を作り出していることで、他には類のない貴重な存在です。これからも永くその掲げた灯を燃やし続けて、この国の美術界にその輪を広げていくべきです。

このように他と違う理想と主張を掲げる汎美は、この国の画壇の常識から外れていることのゆえに、これまでも何度か苦境に立たされそれを乗り越えてきましたが、その中でも最も厳しかったのは1976年から翌年にかけての、汎美術協会再興の時期のものでした。それに携わった者

の中の唯一の生き残り会員として、ここらでその辺のことをもう一度皆様に思い返していただくのも良いかなと思い、以下に10年前の会員便り26号に載せた「境さんのこと」を基にして書いてみます。

私はこの境博正さんと言う人に引きずり込まれる形で汎美の再興に携わりました。その後20数年間に亘って事務局長を続け、汎美を牽引し続けたミスター汎美こと境さんが急性の胃癌で亡くなってから、もう10年も経つのですね。私より一つトシは下でしたが向こう意気の強い頑張り屋で、汎美を死の間際まで思い続けた方でした。ご遺族の話に、亡くなられた日はちょうど汎美展の展示の日に当たっていて展示作業の始まっていたころ、亡くなられる直前の無意識の中にも「展示位置を守れ・・・」などと呟いていたとのこと。魂魄は展示会場の方に在ったのかもしれませんが。今でも汎美に危機が訪れるような時には、彼が「生きていてくれたら」と思うのです。

この会の発足は昭和一桁の古い時期にさかのぼるはずですが、そのころの記憶は若干の創立会員の名前くらいしか残っておらず、我々にとっての汎美術協会は1976年の再興第一回展に始まります。

その前年に現在の地に、それ以前の府立美術館以来の建物に代わる都美術館が建設されましたが、それに応じて日展を頂点とする画壇の封建的体質を打ち破ろうとする、第一回東京展が開催されることになりました。在野を名乗る自由や独立や行動などの団体の会員なども含めて、また広く一般からアンデパンダン形式で作品を公募するかたちで、日展と同じ時期の並立開催を美術館に要求しましたが容れられず、開館のこけら落としとして日展の直前に開催されました。公募展棟だけでは足りず企画展示室も含めた大規模にして画期的な展覧会でした。しかし各団体のお山の大将たちも多い寄合所帯でしたから、準備段階からの不協和音が展示位置などを巡る確執となって表面化し、残念ながら一回展だけで分裂してしまいます。

この辺のいきさつは昨年度の春秋2回の汎美展会場で上映された映画「父への旅、中村正義の生涯」にも表されておりました。

この展覧会を企画し自ら事務局長としてその実現に挑んだのが、封建的な師弟関係や権威主義にがんじがらめの日展（日本画部）を飛び出して、独自の自由奔放な画境を繰り広げて行った中村正義でした。彼はこの重責を果たして後病に倒れ間もなく52歳で亡くなります。ただし困難な会計などの実務を担当したのは、一私企業の社長であった興水璋と言う方でした。この方が戦前から旧都（府立）美術館で展覧会を開催していた汎美術協会の事務局長でしたから、その東京展の無所属出品者の中

から参加者を募って、新しい都美術館に半室の会場を獲得して、戦時中に展覧会も途絶えて会員も興水さんだけになっていた汎美展を復活させたのです。

その復活第一回展は1976年の3月9日から21日まで開催されて、私も興水さんからの要請を受けて出品し、搬入出の際に大柄でがっしりした体格と赤ら顔に真っ白な総髪の興水氏に会い、公募推薦制などの汎美の趣旨や抱負を伺いました。もっとも、そのとき彼の事務を手伝っていた眼の醒めるような美女の存在が大いに気になり、出品に前向きな気持ちを抱かせられたようでしたが。その女性は奥村幸子さんと言う方で、その後も会員として一時会計なども受け持っていた方が、まだお若いうちに病魔の手で喪われてしまいました。

ところで、その復活第1回展が終わって間もない4月10日に興水氏が突然亡くなります。朝のジョギング中の心臓発作で路上でのことでしたから、新聞紙上にも報じられて驚かされました。

美術館の利用権継承のため、急遽興水さんの奥さんやご長男の肇さんが出品者の主な方々と連絡を取り、出品者全員に呼びかけて5月30日に総会を開き、当日に会費を納めた者を会員とし肇さんを会長とし、数名の常任委員と会場や組織のあらましを整えて美術館に届け出ました。

ところが相前後して元からの会員を名乗る小澤敦及び津田某なる人物からも、会場を引き継ぐための届け出があったということで、美術館は両者に一か月以内に一本化するように通知してきます。その結果常任委員と小澤氏の間で話が進められ、7月に入って間もなく出品者宛てに突然常任委員の一人三橋氏から「汎美は小澤氏の会に吸収されたが、私は脱退して別の会を作る」との文書が配られて来ました。次いで17日には総会時に納入した入会金が送り返されて来て、さらに月末には汎美展改称「サロンドトーキョー展」事務局の名で「会員になりたい者は審査会をするから作品を持って集まるように」との通知が届き、我々事情を知らない者たちを唾然とさせました。

ここで三橋氏に応じた形で境さんが動き始めます。有志に呼びかけての何回かの会合ののち、8月29日の夜に臨時総会を開きます。私の下にもこの会合の案内DMに前後して、境と名乗る人物から出席を勧める電話がかかってくる。高校の教員で忙しい毎日でしたからあまり気は進まなかったのですが、彼の熱心な誘いに応じて出席しました。

この総会ではこれまでの経過が報告された後に常任委員が全員辞任し退席して、このため境さんを中心とする数人の出席者によって今後の対策が講じられることになりました。

その翌々日の8月31日には都美術館に赴いて担当者の説明を聞き、以後9月4日、12日、16日に私も含めた有志の会合を持って対策を協議し、19日と26日に再び美術館に質問と申し入れに行きましたが明かす、10月15日に奥水夫人の紹介で鹿野琢見弁護士宅に赴きご協力をお願いし、了承を得ました。

翌日再び会合して17日には再度の会員総会があり、以後弁護士のお宅などでの打ち合わせが繰り返されました。境さんの残したメモにあるだけでも10月22日、26日、28日、31日、11月3日、16日、23日(運営委員会)、12月3日、12日(運営委員会)。その間にこれに加えて10月30日、11月3日、11月20日と3回にわたって都美術館との交渉があり、会の規約の作成や都美術館や裁判所に提出する書類の作成があり、裁判資金の足しにと上野動物園前の売店のためにパンダ焼きの原型や絵看板の作成もしました。

境さんが常にリードしていてすべての会合に出席しており、私と宮本さんと言う方(再興後2代名代表)が主要なお手伝いメンバーで、それに奥水夫人や根岸さんと言う水墨画家(再興後初代代表)などが時たま加わっていました。運営委員会や総会の時にはさらに多くの方が集まりましたが、先年亡くなられた大はし3代目代表や、今は既に亡くなられてご記憶にあるかもしれません岩井さんや水谷さんや奥村さんなども居られたはずです。

ウィークデーの昼間は勤めのある身ですから、会合の殆どは夜間であり、しばしば境さんと二人地下鉄の弁護士事務所から地下鉄の根岸駅の階段を終電に間に合わせようと駆け下りたものでした。まだ二人とも40歳になるかならないかの時期でしたからできたことです。私は都立高校の美術科教師、境さんは電電公社(NTTの前身)の職員でした。

提訴は都美術館とサロンドトーキョーの両者に対して行いましたが、そのうち奥水さんの遺品の中から小澤氏や津田氏の退会届が見つかったこともあり、彼らが都美術館に出した書類に虚偽や不備があったことも分かってきました。それに引きかえこちらは鹿野弁護士の指導で手落ちの無いように規約を整え(おかげでこの会の規約ほど整ったものは美術団体としては少ないでしょう)、総会などの会議や組織をきちんと整えてありました。多分美術館が処理に困ったのでしょう。館の日程の都合もあり急遽和解の方向へと進みました。

12月13日に東京地裁に提訴書類を提出し、14日に弁護士宅での書類の最終調整と打ち合わせがあり、17日と1月14日に地裁での審理があり、19日には都美術館で和解文の調整をして24日に地裁にて

和解の成立に漕ぎ着けます。これでやっと会場使用权を我々の汎美に取り戻せたわけです。29日には境さんが赴いて、都美術館への手続きを完了し翌30日に会員総会を開いて展覧会の実施要項などを決め、晴れて展覧会の準備に入ることが出来ました。

3月6日搬入、10日～23日、'77汎美展開催。出品者は55名で作品は77点。まだこの時の会場は半室だけで、奥の休憩室の部分を衝立で区切って事務所にしていました(全一室が使えるようになるのは'87年から)。

以上の経過があつて我々の汎美が再出発できたのです。最初の常任委員達が投げ出した時に境さんが立ち上がっていなければ、そして裁判闘争に訴えて和解にいたるまで常に先頭に立って活動してくれなかったら、この会は存立しえなかったのです。大詰めの裁判所通いの頃には彼は体調を崩して入院しており、高熱を冒し、医師の制止を振り切って病院から出かけていたとのこと。そんなことは彼が亡くなってから奥様から伺ったことです。

現在の汎美の顧問弁護士である鹿野元さんの御父上である、鹿野琢見弁護士の度重なる指導教示や裁判活動も忘れてはなりません。裁判費用については一切我々の会への請求はありませんでした。そこで再興展以後、氏の'09年に亡くなるまでの間、毎年会員の作品を一点一点お礼の代わりに贈呈してきました。それらはしばらく氏の事務所の壁に飾られた後に、氏が館長を務めていた弥生美術館に收藏されました。

その後、97年には美術館側から「会場にゆとりがあるようだから半室に戻してはどうか」と言う話があり、この時も境さんは直ちに館長に面会して申し入れをし、事なきを得ました。2段掛けをできるだけ避けていることや一作家の作品を複数展示することの正当性を強く訴えたのです。場合によっては裁判沙汰も辞さないという彼の強い意思表示があったからでもあります。

境さんは汎美が苦境に立つたびに「この会はみんなで協力して運営している会だから、なにが起きても大丈夫ですよ」と言っていたことを思い出します。

昨今の二つの美術館の5年毎の会場貸与の見直しの制度は、再び三度汎美にとっての大きな不安材料になってきました。前回(2011年)の見直しではどちらももめました。その辺りについては、いつかまたの機会にまとめてみたいと思っています。

研修報告

- *研修展覧会 チューリッヒ美術館展
- *研修日時 2014,10,20
- *参加者 吉田 広瀬 日和佐 大野 久保 久保夫人 相京 島田

今回、久保さんの奥様が特別に参加して下さいました。
鑑賞後、近くのファミレスで、脱線もせず楽しく絵のことを中心に話し合いをしました。
今後も、多数の参加をお待ちしています。

研修係

チューリッヒ美術館展をみて

島田 隆一

印象派からシュールレアリズムまでというサブタイトルがついたモダン創成期の作品74点が展示されていた。必ずしも個々の作家の代表作と言うわけではなく、あくまでチューリッヒ美術館所蔵の作品をイズムごとに分類・展示したものだ。

画集では作品の大きさや、マチエール、それに色彩も正確にはわからないので、そういう点では実物を見て気づくこともいろいろあった。

セガントーニの象徴的な作品は、点描派と同じような手法で描かれている。但し、点の代わりに、細長い1~2cm位の絵具の固まりのような線を並置して描かれている。布を織り込んだようなマチエールはそのような手法で得られたものなのだ。

シャガールの作品は5~6点まとまって展示されていた。それまで画集で見ている限りではシャガールの良さがわからなかったが、どの作品も密度があって充実していた。

色彩も透明感があって美しかった。画面の形や大きさと絵の内容がマッチしているのもよかった。

ホドラーの作品は、これまで画集で目に触れたことがある程度だったが、今回、実物を見て認識を新たにした。

平行主義と言うのは、今一つよくわからなかったが、作品「真実・第2バージョン」は素晴らしかった。意味性が強く、目に見えない寓意的なものを可視化して伝えようとしている点では18世紀までの西洋美術の伝統を受け継いでいる。反面、今のポストモダンアートと通じる一面があって、モダンの造形性が強い作品群の中にあっては、逆に新鮮に見えた。

モネの作品「睡蓮の池、夕暮れ」は2m×6mの大作で、固定された視点から眺めるという感じではなく近接視というかカメラでズームアップしたような画面だ。

その中に入って動きながら眺める感じは、確かによく言われる戦後の抽象表現主義との親近性を感じる。マツトな画面で大きいので近くで見ると、太い筆一本で睡蓮と水面の揺らぎみたいなものを見、無雑作に描きながっているように見える。

画集と違い実物はタッチが目立つのだ。それが、バルールというか調子が、もう少し明るい暗いと破綻する一歩手前で決まっている。また、色の補色の関係等にも配慮している

のがわかる。セザンヌがモネの目を賞賛した言葉や、色彩の洪水という言葉思い出した。すでに、3次元のイリュージョンを平面に再現するという意図は全然感じられない。モダンが印象派から始まるというのは、その前のイズムとの間に断層があるからだろう。印象派の一世代前と言うとクールベやミレーの写実派と言われている。市民社会になり、題材こそ変わったが、画風そのものは遠近法や明暗法等、伝統的な技法を用いて3次元のイリュージョンを平面に再現しようとするものだ。画風が明るく一変するのは印象派からだ。8月に「オルセー美術館展」でマネの作品「笛を吹く少年」を見たが、少年の立っている床面も、背景の壁面もほとんど同じ明るさの灰色一色で、平坦に塗られているだけだった。少年から背後の壁まで仮に5mあれば、その距離感を出そうとするのがそれまでの古典的な写実だが、マネの絵は具体的な対象物(=オブジェ)こそ描かれているものの、3次元のイリュージョンを再現しようとはしていない。モダンの絵画が3次元のイリュージョンの再現から、絵画固有の世界の探求に向かったということがよくわかる。自然の再現でなく主体的に解釈するようになったのだと思う。それと我々が思っている以上に、カメラの発明は衝撃的なことだったのではないだろうか。当時の印象派の画家はカメラの画像を見ているし、事実モネやドガは利用したといわれている。カメラのできないことを目指す方向は必然的なことだったのではないだろうか。モネの作品「睡蓮の池、夕暮れ」もそのような背景の反映だと思う。カンディンスキーの作品「黒い色斑」は全く音楽のメタファーだ。音と形や色の共通感覚的なところを手掛かりにしているのだと思う。モンドリアンの作品「赤、青、黄のコンポジション」は、無機的な幾何学的デザインには決して見えない。現実の空間はグラウンドがあって、その上に樹木なり建物が建っている。つまり、水平と垂直の世界だ。我々の潜在化された記憶の中に眠っている<空間イメージ>みたいなものを絵画的なイリュージョンを使って取り出している感じがする。現実の<空間イメージ>が、絵画的なイリュージョンに置き換えられているように見えた。小さな作品だが大きな世界を暗示している。カンディンスキーにしてもモンドリアンにしても、この頃の抽象は何かしら現実世界とのつながりが感じられて、戦後の抽象とは趣がちがう。今回の「チューリッヒ美術館展」は、数も少なく物足りない点もあったが、1イズム1部屋にコンパクトにまとめられているので概観するには都合がよかった。粗っぽい言い方だが、モダンの創成期は、印象派、後期印象派、ナビ派……抽象と、時代が現代に近づくにつれて徐々にオブジェの世界から遠ざかり、代わりに、色や形や線等の造形的な要素の比重が増していく。抽象に至って具体的な対象物(=オブジェ)が何も描かれていない画面になる。今回の展覧会はこの3次元イリュージョンの排除されていく過程を見ているように思えた。



「チューリッヒ美術館展を観て…」

2014年11月15日

相京 三千代

チューリッヒ美術館が所有する、印象派からシュールリアリズムに至る 20 世紀前半の絵画の流れとその画風を観ました。全体に大作は少ないですが、良い絵をセレクトしてあるという印象でした。

その中でセザンヌが私の好きな画家です。中学生の頃、私を絵に導いてくれた画家で、今回もやはり良い絵だと思いました。セザンヌの絵には彼の清廉な哲学的精神が感じられます。

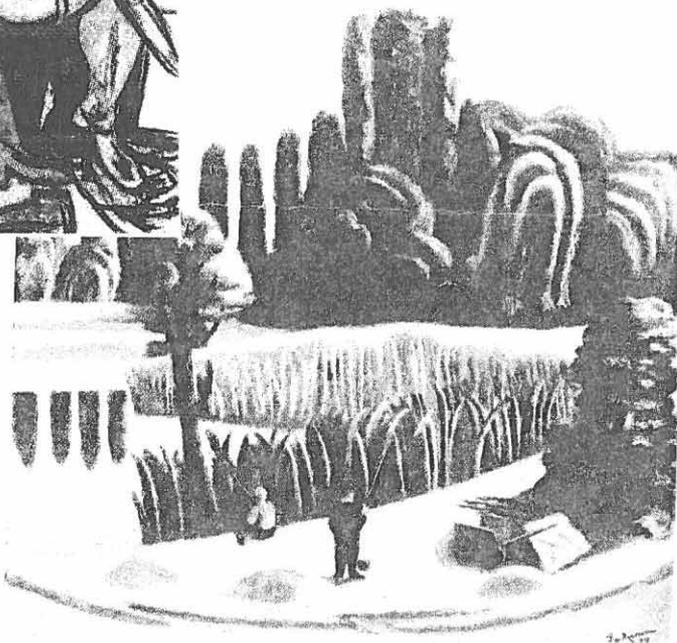
その他、気になった作品はマックス・ベックマンの絵です。ベックマンは当時、如何なる前衛芸術家の団体にも交わらなかったそうです。

以前、ベックマンの絵はスイスの Basel で見ましたが、印象としては古典的な様式も感じさせる静かな生活や風景画で、シュールな感じのする描き方のものでした。表現主義的なものが加味されているような作品でした。今回の輪郭のはっきりしている人物画は初めてみました。(→図1.) 時代と共に画風が変わったのでしょうか。私は表現主義的な風景画の方が好ましいと思いました。



1. ベックマン：今回のチューリッヒ美術館展

2. ベックマン：Landschaft mit Vesuv, 1926.



3. ベックマン：Die Landschaften



研修会・チューリッヒ美術館展に参加して

2014.10. 吉田 敦彦

展示を見終わってなんとなく画集を買ってしまいました。我が家は家内も描いているから、描く場所と作品の収納にスペースを取られていて、本を買うことはできるだけ避けてきていたのですが、第一級の有名作品は無かったけれども、どの作品も粒選りで、絵葉書では間に合いそうもないと感じたからです。

モネもクレーもピカソやモンドリアンもシャガールも良かったのですが、表現主義や象徴主義などのベックマンやココシユカやホドラーなどをまとめて見られたのも良い機会でした。それぞれ個性の強い画家たちの作品でしたが、共通するのは造形性(構図と配色)と表現性に対する鋭く厳しい感覚でした。

私は「デッサンのすすめ」なんて本も書いていますが、その中で最も言いたかったのはデッサン力とは「そっくりうまく描く技術」なんてものではなくて「空間を正しく認識する能力」だと言うことでした。空間とはキャンバスなり画用紙なりのことであり、その全体を一目で見てその空間を生き生きとしたものに変えていく能力だということです。その能力はアンリ・ルソーのように先天的に持っている人もいますが、我々凡人は自然を相手に自分の感性を磨くことで得ていくしかないのではないかと言うこともあります。

良い作品を見ると言うことは、我々美術制作に携わる者にとっては至福の時ですね。描いた人の感性と素直に対話できるから。キャンバスと言う空間を自由自在に操って感動を生み出す作品に対するには、多少なりとも見る側にもデッサン力があつた方が良いでしょう。そんなことをルソーの描いた詩人の肖像(ちつとも似ていないそうです)を見ながら考えました。人物の左の背景に小さく描かれた3本の煙突と、その一本からふらふら立ち上がっている黒い煙の的確さ。

午後3時からで、ちょっと時間が早いとは思いましたがワイン等頂きながら、参加者全員で感想を話し合いましたが、これもなかなか楽しい会でした。簡単に各自のお気に入りの作品を言うことから始まって、その作品について自由に話し合う。いろいろの見方があるなと感じたり、そうだそうだと感じたり、なるほどと感じたり、こういう機会をもっと多くあってよいのではないかと思いました。

大滝 明様を偲ぶ

編集子

去る2月20日、大滝 明様が84歳にて鬼籍に入られました。氏は画家・大滝龍谷氏を父に、本所(墨田区)に生を受けました。小学6年時に太平洋戦争、そして3月10日の東京大空襲を経験され、その悲惨を語られておいででした。戦後は我が国の民主化に努め、仕事の傍ら劇団を結成、また平行しお好きな絵を描かれ東京都知事賞など受賞されました。編集子はその頃の社会主義的リアリズム風の作品に強く印象づけられました。後、自由美術・主体美術・汎美と移動され、その間調布美術協会を牽引、汎美の事務局や代表など、社会的活動にも貢献されました。また国立新美術館の中小団体差別問題への抗議運動＝一室協議会にも積極的にご尽力されました。

幾多の仕事を通じた氏のお姿が甦ってきます。これからは「お墓に留まるばかりでなく幾多の風になって」汎美を吹き抜けてくださることと共にご冥福をお祈りいたします。 合掌。



ムーミンの原作者は画家だった。

昔、子育てに多くの時間をとっていた時期、アニメ「ムーミン」シリーズがTV放映されていて、子といっしょに見入り、北欧の地に根ざして繰り広げられるドラマ、描き出された風景とユニークなキャラクターに心とらわれたのでした。

原作者は Tove Marika Jansson トーベ・ヤンソン。

「ムーミン」と「トーベ・ヤンソン」に会いたくて横浜そごう美術館 ('14/10/23-11/30)に行きました。

北欧ノルウェー、主人公は人里離れたムーミン谷に住むトロール(北欧の妖精)のムーミン。

パパとママとムーミンの暮らしが繊細に描き出され、ムーミン一家と周りに暮らすユニークなキャラクターが繰り広げる日常にすっかり虜になっていた「私のあの時」を懐かしみ「私のあの気分」を再び味わいたかったのです。

放映されたアニメ「ムーミン」は、丸っこい体形で目力は優しく話す言葉の調子は穏やかそのものと記憶していましたが、ヤンソンさんの直筆原画はコントラストが強く細かいペン画でシャープ、勢いの強いものでした。灰色濃く覆う上空、強い風、冷たい雪、短い夏季が終わると凍える気温が続く北欧の風土は「この絵のようです」と語りかけてくるのでした。私が育った環境に似ていて、その自然の中で繰り広げられるドラマに、ムーミン谷の住人の血が温かくかよう印象を持ったのかもしれない。

ヤンソンさんが画家をこころざし精進を重ねていた間に「ムーミン」が生まれ、世界中の多くの方達に愛されていた事を初めて知りました。

会場には画家ヤンソンさんの自画像が多く展示されていて、その多くは誇張も削除もない写実を元にした実直誠実な絵で、地味な渋い輝きを放っていました。年令を重ねてゆく独りの女性の成長を年代ごとに感じ取れるのです。

その中に一枚、明らかに筆致すばやく走り、使われた色も鮮やかな自画像がありました。旅先のパリで短時間に描き上げられたという小品です。「トーベ・ヤンソンの自画像の傑作と評価が高い」という説明文があり、「なぜ？」が湧きました。

汎美だよりにあったK氏の「自画像を描くことについて 抜粋」を読んだせいかもしれません。そこに「(自画像とは)内面と外部の不安定な緊張関係を描くことによって自己を確認する作業」ではないだろうかとありました。

絵の評価とは何なんだろう?他人の評価とはなんなんだろう?と改めて思ったのです。そのヤンソンさんの小品は確かに解りやすいイラストレーションのようなのです。老いを感じる顔の輪郭と口角の弛み、目のたるみが見てとれます。評価するとは、この絵をマイルームの壁に掛けたいということか?評価が高いとは売れるということか?天国でヤンソンさんはその声をどう聞けるだろうか。

長年の制作の葛藤熟慮があつての結実がこの小品なのだ、長い時間の精進、切磋琢磨がほとぼしり出てこの小品が生まれたと納得しようとしてました。制作は時間を長くかければ良いものではないと言われます。解っているつもりですが腑に落ちません。

今は、壁を軽快に演出する絵が多くないだろうか。生きるのが難しい社会だから元気になりそう、雑念を払えそう、整理できそう、すっきりできそうな期待が求められるだろうか。

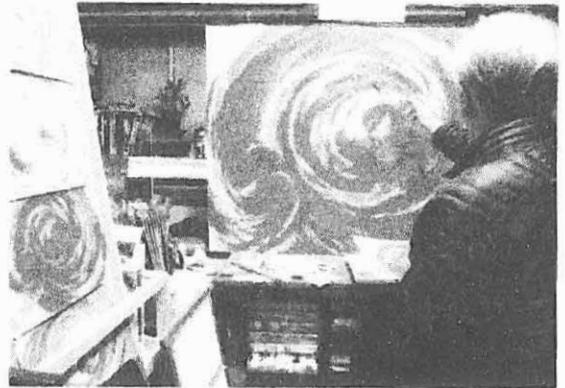
簡潔に深々とした色と形が浮かび上がった絵を描きたいものだと「ムーミン展」会場を巡りながら思ったのです。絵の説明文は読まないことにしようと帰宅しました。(三竹 康子)



今でも想う事

左手の機能が驚くまでに動くようになり歩行もかなりできます、右手は健在ですから絵も字も自由に書けます、すべて工夫次第で出来るようになります。人生と同じように？・・・

79歳になります。良い人は先に逝くと言いますが、私だって今あるのは力限りに生きまくってきたからで、残る命を大切に楽しく生きましょう。



古代ローマの人々の生活がわかってきました、いま人間の歴史と文化は大きく広がっています、

天文学の可視範囲が知りうる時間の歴史で、その空間は数百億光年らしく、実感は誰にも持てないでしょう。

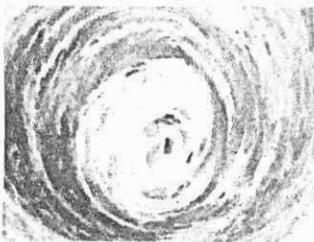
人類の歴史も生物学的に、派生と同時に現代人と同じ能力を維持していると考えられ、ホモサピエンスは発生以来同じなら文化も文明も早くから開けて、歴史も流れる水のごとく次ぎ次ぎに生まれては消えたとしか考えられず、現代人が知り得る歴史の時間も空間も限られ、歴史も6000年までが限度、でもそれ以前のものを知る事が出来ないだけで、無かった筈は無い。

現に4000年前の見事な壁画がエジプトで見られ日食の予測計算も出来なければ不可能なことも公示されています。

精神も思考認識も脳の生理的感覚から生じるならば、すべての概念は主観で客観の実態は人間には知りえないのですね。

孔子様が「前世が分からないのに後世が分かるはずはない」と言っていたそうだから人の思考には限界がある。

広大無辺これが最先端で、しかも昔から伝えられていた儘の実態の感覚・・・



「夕景の想い」

★古代の人々の本来の生活はもっと自由と楽しいもので、私達のように働くばかりで稼いでは使って、お金のことばかりに明け暮れすることなく、食べて吞んで歌って恋して暮らすことが生活するということで、仕事は興味を持ってする業や行為のことで、労働者として働くことではなく、文章を書いたり好きな絵を描いたり、自らの工夫と労力で建築物などを構築することです。

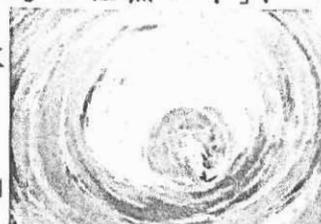
歴史を知る南の人たちは皆そうです。イタリア・スペイン・ギリシャの人々がそうで、経験だけに生きるイギリス・ドイツ・北アメリカなどは経済人でギリシャの破産などを心配しますがギリシャ人は破産などかまわない人たちです。すでに生活できているからお金の貸し借りの心配などしないようです。お金は交換手段の便利を作るだけで、生産経済の向上を維持するなんて意味のないことだと考えているのでしょう。

「愚者は経験だけに学び、賢者は歴史に学ぶ」と言います。

私はそれが本当だと思います。「死んで持っていけるものは無い!」、まして今のお金(マネー)は実体のないもので、ただの数字で、実体のある真の資産ではないのです。

死を知るとき感じます。

「子に想う慈愛」



話題のトマ・ピケティ著『21世紀の資本』で富の偏在な配分を知って驚き、全訳された「共産党宣言」を見比べ、なんとということかと考え込みます。

今の私は絵の創作を考えることが仕事で、また孫子の成長を楽しみながら暮らすことが生活です。

まだ生きていられることに感謝しています。

これは無学な私に代わって学習した三人の娘たちに教えられたことです。不思議と子供たちに恵まれ、いずれも特殊早熟児で、3歳で分数を理解し、2分の1+3分の1=6分の5と暗算しました。中学で微分積分と多次元方程式で因数分解を駆使して解くことに挑戦していました。受験勉強はせず特待生となってエリート大学の心理学コース(現代の哲学)に進みました。次

女は学芸大附属高校をへて東大を嫌って早稲田へ大熊奨学金を受けて出ました。

そこで人の幸せを研究し、人生は愛と楽しい家族生活が幸せを意味すると学び、それを選びました。

老いては子に従い、わが人生も世間で言われたような不幸でも愚かでもなかったと感じています。15歳になる孫が早稲田高等学院に試問試験だけで入学出来ました、今期の主席になるらしく、馬鹿の血筋ではない様です。

★NHK朝ドラの村岡花子が学んだ修和女学校は、古い校舎が残る桐生の群馬大学工学部同窓会会館でロケしたそうです。

保存されたあの教室はかつて授業を受けた教室で悲しみと共に深い思い出の所です、家業を父と共に働いていたので夜間部に入って勉強していました。昼間に落ちた生徒がほとんどで出来が悪いので、わたしが群馬大学工業短期大学部紡織科の主席になっていて、級長は授業前に教室の用意と教授に代わって出席を取り、後かたづけもさせられて休む暇なく、仲間の代返は出来ても自分のそれは出来ず、ついにはバテテしまい、父にも急死されて断念を余儀なくされることになりました。

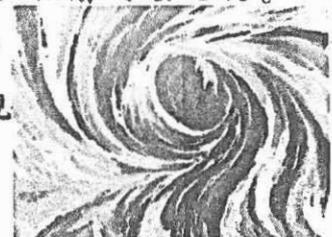
あのころの教授たちは親切で、その後もよく面倒を見て下さいました、図案の牧島要一先生（岡田三郎助の弟子）はいろいろ心配下され、父親のような心配をしてくれて、それ以後は師の家に通って師が亡くなるまで絵の勉強を伝授させていただきました。

良き師に恵まれて幸せだったと思えます 「皆の顔が見られる日を期待します、生きて喜べるのは逢えることです。」

死の淵をさまよったものが解ることは、会える・話せる・喜べる・愛せると言うことの思いだけです。

それが生きることの具体的な意味で知性も倫理も心情には勝てません。

15 汎美展は、暮れから制作に没頭していますが進行が芳しくありません。「大胆にかつ単刀直入に感情表現を試みたい！」 強烈で鮮明でありたい…。



「生命の花」

春秋游吟 二十五 (撰)

二〇一四年寒露より二〇一五年立春迄

愚 聴風

(大辻敦成)

月蝕・神無月八日二句

あかつきや直哉に引く地平線
蝕月の小豆鼠色に風さわぐ

団栗や静寂つつみて甕を打つ
鈍いろに暮れてなお打つ韻たしか
かぜ震う枯れ穂さみしき多摩川堤
泡立草と真横に擲らて夕日影
みづ滔々碧に染まらず終の蝶
露さむし遠音を分けてみづの往く

八甲田山道逢十数句

峯桜屈曲が幹に晩秋のかぜ
峯桜八甲田風に身をかかむ
あはれ一入 范に残れる枯れ薊



雨雲に黄紅葉浮きし范の夢 「峯桜の晩秋」

山毛櫨落ら葉濡れてしとどにやはらかき
山毛櫨黄葉泛かべて疾し瀬も時も
水面打つ瓢箪沼の晩秋しぐれ
山毛櫨やまに「生」幾許ぞ晩秋のあめ
黄に朱に木の葉を巻ひて瀬をはやみ
山毛櫨黄葉阿修羅の声にはろと散り
山毛櫨黄葉「阿修羅」轟々みづ滔々
「石ヶ戸」に阿修羅棲みたり晩秋しぐれ
山毛櫨葉濡れ「寒水澤」にあきのあめ
黄と朱と怒りもて時けぶなもみら

寒露

小豆鼠色 暗赤色がかった灰色。風騒ぐは月蝕の不安の胸騒ぎを風に託した。
甕 数石、しきがわら。
鈍いろ 暗灰色。その染料は団栗から採る。

霜降

范 高層湿原



葛温泉瓢箪沼晩秋

阿修羅 奥入瀬溪谷の名所・阿修羅の瀬。
石ヶ戸 奥入瀬の巨石信仰。

撫黄葉うす鈍に染め沼のあめ

やがて閉ざす雪の予感か黄葉燃ゆ

風音に瀬韻を併せ黄葉降る

枯れ待つ宵終の黄蝶を華と視し

日文ひの葛蔓揺れて冬隣り

葛蔓を西風吹き抜けて冬立つ日

いらぬの実子の朱におもふひとの辰

東銀座情緒二句

突然に銀座を潤ふ晝時雨

来し方へ昭和通りの夕時雨

昭和通りと言う言葉に懐
旧の情念。

櫻紅葉 輪廻の生や朱一葉

烏瓜下がる真直に夕苗

朔風の心なきさま葉を払い

葛ばぐさ、いよよ目立ちて柞ふる

柞葉や西風の飛跡を如何に描く

鶉触らばはらはらはらと黄葉降る

花八つ手ひそと秘め咲く墓のかげ

冬萌か露のひかりか雨後没り陽

齊しからじいのら枯葉の如きもの

楯朽ちて吾の生きしかた如何ばかり

楯||樹木や根の切れ端。

うす鈍||うすにび色、薄

い灰色。

立冬

小雪

朔風||北風

柞葉||楯・櫟の古語

未年歳旦句

未だ醒めず浪漫の夢や初苗

季迅しのこりの石路に想ふもの

彫られたる生き様の痕冬の柚子

寒菅や吾がこころ根の織き莖

寂寞たり花枇杷こころに宵のあめ

倒れ朽ちた樹木。薪。

未だ||未歳をかけて...

石路||つわぶき、つわと

も。

大雪

濼にはたつる 陽の来復に閃きぬ

寒林二句

寒林やかげむらさきの乱れ編
築山つとみに寒林うつすみだれかげ

行く雲や「空即是色」冬の氷
梅剪らば蕾いまだに処女のごと
行き逝くは伸びる日脚の茜雲

小時日二句

あを笹の色あさやかに冬の泥
万両やその実深紅に歳の明け

望しらの月寒林梢揺るぎなし

陽のぬくみ背中に孕みて寒の猫

大寒や虚空漆黒に澄みわたる

寒林のむらさきだらたる彩いまだ

日だまりに寒野罌粟咲き春兆す

春兆す追儼ついでの鬼やいま何處

「鎮防ちんぼう々々」落とす芽影にかたむきて



冬 五

行く雲と流水は世の常、

「雲水（僧）」の語源、

行レ「行」は進む等移動

と、「逝」は死を、つま

り行き過ぎる雲と消え去

る雲、

小 寒

大 寒

お茶の水土手にて遠過

す。 立 春

毎立春、建物に貼付され

る火伏せ札。何故か火燭

の字、その傾きに風情、

海市レ燈気楼、

わが想い赫あかあまたたり海市燃ゆ

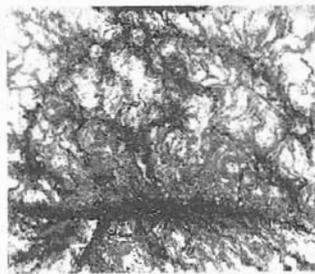
二月一日ボタニカルクロックス開花（去年は一七日）

花洎はなせ夫藍ふらん蕊しべの黄に視し夢の果て

東風這はば小ちさき野草のぐさのふるへさま

三寒の四温を抑へ余寒くる

二の腕を鏡の前に妻の春



「小断層上に於ける天体の蝕」

寂寥の在処いつくと月おぼろ 愚 聴風

春ね、鬱屈した冬から解放されて、ああ空がなんて明るいんでしょう。また今年も汎美展のお葉書戴いたんだけど、茜、いつも思うの…「汎美展が春の女神・佐保姫を連れてくるんだわ」って。

この間ね、毎日新聞の 1/21 だけど、スウェーデンのエリクソンで心理学者、チョット面白いレポートだからお話聞いてくださる？ 六十代半ばの方。それはね、

「1万時間の法則」

って言うの。1 万時間の練習は、才能の有無にかかわらず高いレベルに到達できるってこと。例えばね、トップレベルのヴァイオリニストなんか 20 歳迄に 1 万時間の練習を費やしてる…ていうの。これって 1 日に 3 時間の練習だと 10 年かかるらしいのよ。その為にこの先生は

「心的表象」

の必要性を挙げてらっしゃる。それは「イメージがモチベーションを高め、行動を引っ張ること、経験や想像から未来をイメージすること」になるんですって。又その為には「実力のある指導者が必要」ともね。でも、ジャンルで違うかも知れないけどお、美術なんかは「描き方」教えたらダメ、技術じゃあないのよね。指導者たるものは

「ベクトルを示唆すること」

が大切と茜は考えるわ。表現技術教えるとみんな同じになっちゃうもの。こういう団体ってよくあるでしょ。考え方とか、そう、コンセプトっていうかな…それが大事ね。あ、ベクトルって知ってらっしゃる？。物理用語だけど、力と方向のことよ。

茜、美術系の教育ってどんなかと思って覗いたことあるんだけど、俗に

「デッサン200枚」

とも言われてるらしいの。汎美の仙人・Y 先生なんか「デッサンのすすめ」ってご著作があるのよ。デッサンは有効なトレーニングで、抽象の練習にも通じるって、具体的に易しく説いてらっしゃる。でセンセの哲学が含まれてんの。炯眼の方ね。皆さん読まれると佳いんだけど…。お話戻るけどさ、例えば美系大学なんかでは普通、午前中はデッサン（石膏・静物・人体）、午後は一般教養や各専攻の実技、それに関係科目。仮にデッサンのみで考えてみましょうか。デッサンは普通 20 時間で仕上げるとして、1 枚 / 1 週、年間 45 週とすれば 45 枚 / 1 年 でしょ。900 時間 / 年 よ。授業内のデッサンのみでも…。だから 10 年なら 9,000 時間でわけ。200 枚だと 4,000 時間。デッサンだけやってる訳じゃあないし、各専攻の実技、習作・制作があるでしょ。1 万時間どころじゃないわよね。芸術家にしても学者や職人にしても、スポーツだって結局は持続よ。「好きこそもの上手なれ」って。他に当て嵌めれば、たとえば家庭料理なんかだと、1 日 3 時間関わるとすれば 10 年で 1 万時間でしょ。お嫁さんも 10 年経てば一人前ね。7 年目の浮気がバレて分かれたらダメ。

この法則ってプロのアナリゼから出てきたんでしょが、「質」に関わってないのね。茜、本当はね、「量」に換算して物事を見るのって嫌いな。物理では「質量」って言うでしょ、重さのこと、ちゃんと「質」が入ってるのよ。でも「一万時間」ってチョット面白い視点かな。

ああ、茜、ここにきて「質量」が増えちゃったわ。寂寥感があると、ついつい食べ過ぎになるらしいの。娘も嫁いじゃったしい、孤独なのね。「他人の裡の孤独を観るとき、私の孤独は癒やされるのです」なあって仰ったの何方かお分かり？ 先世紀初頭の詩人・リルケよ。さすがに格好いいこと仰るわね。でもう…茜、「おんな」は未だ決して、決してよ、失っていないの。そりゃ娘に比べれば茜の方がずっと艶めかしいと思うわ。ホラ…どう…。

大野善孝

温厚、篤実なお人柄で多くの会員に慕われた大滝明さんが今年2月20日逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

大滝さんは1999年度から2002年度まで事務局を、2007年度から2010年度まで代表を務められました。それ以前は、代表、事務局長に3期以上（1期は2年）は再任不可の規定はなく長らくそれぞれどちらも既に故人になりましたが、大橋さん、境さんが務められていました。再任に一定の歯止めをかけ色々な人材に汎美の運営の運営の中心を担ってもらうことがより民主的な汎美を作ることになるとの考えから、1999年の総会で大滝さんが事務局長に選出され、以来汎美の中心的存在になり汎美の発展のためご尽力くださいましたことは会員の皆様よくご存知の通りです。

特に国立新美術に於ける本展の開催を決め、その5年後の見直しに当たって汎美が排除されそうになった折、継続使用を勝ち取ったのは大滝さんのご努力によるところが大きかったと思っています。奇しくもお亡くなりになって5日後の2月25日、平成29年度から5年間の「国立新美術館の使用に関する説明会」が開かれ、継続使用が可能との説明を受けました。

この結果を大滝さんに報告できなかつたことが残念です。でも、きっと「風」になって満面の笑みを浮かべ喜んでくれていると思います。

大滝さん ありがとう。安らかにお眠りください。

2015年2月27日

大滝 明様のご子息・秀治様の会葬御礼より

「本当にありがとう、温かな面影を忘れはしません」

“千の風になって、あの大きな空を吹きわたっています”

大好きな『千の風になって』を口ずさみながら嬉しそうに笑っていた父の姿が印象深く残っております。まさにこの歌詞のように、これからも父は風となり皆を見守り続けてくれるのでしょう。

父 大滝 明は、平成27年2月20日、皆の胸に沢山の温もりを残し84歳にて生涯を終えました。

長年絵画に親しみ、勤めに出る傍ら塾を開いて地域の皆様との触れあいを楽しんでいた父。子供から大人まで、多くのご縁に恵まれて、いつも周りには笑顔が溢れていたものです。自身も作品展に出展したりお仲間と腕を磨いたり、好きなことを満喫し、充実した毎日を送っておりました。

また、家族で紡いだ思い出も大切な宝物。以前 皆で温泉旅行をした際には、のんびりとお湯に浸かったり美しい桜の花を眺めて…かけがえのない時を過ごすことが出来ました。

父といた日々は本当に幸せでしたから、別れが惜しまれてなりません。今はただ逝く背に万感を込めた「ありがとう」の言葉を添えて向かう先での平穏を心静かに願います。

お世話になりました全ての皆様へ、深く感謝申し上げます。

大滝秀治・親戚一同



collaboration 「白昼夢」 ポッチャーリ監製

編集後記

今年も汎美展が春の神・佐保姫をお連れしました。ご投稿の方々、原稿を深謝します。展覧会を目前に大滝明氏は鬼籍に入られると共に「千の風」になられました。ご冥福をお祈りいたします。

当「汎美便り」は常時原稿を募集しています、進んで投稿くださいますよう。
汎美術協会編集係

発行 2015年3月 汎美術協会事務局

〒168-0074 杉並区上高井戸2-4-10

大野 善孝 方